

〈企画書〉

提出者：浅井利恵（桜♡RIE）

【タイトル】優しい今日を生きるために

【概要】

本企画は、人との「絆」を身近な人間関係や魂からの縁という視点で描きながら、「本当の幸せとは何か？」を読者の方に問いかける物語です。

主人公は1人であることを好み、淡々と暮らす24歳の女性。彼女が繊細な青年との出会いをきっかけに、家族との関係を見つめ直し、人を信頼することの安心感や、愛することの喜びに目覚めていきます。この過程を通じて、読者の方にも人との「絆」の大切さを疑似体験していただける物語となっています。激動の時代、生きづらさを感じる人々にとって、人の温かさを思い出し、「優しい今日」を生きるための希望になればと願い、綴った作品です。作者は15年以上、「愛と調和」をテーマにした物語を17作品、書き続けてきました。

【想定する読者ターゲット】

- ① 20代の子ども世代から、50～60代の親世代
- ② 人間関係は苦手だが、本当の絆や魂の繋がりを心のどこかで求めている人
- ③ 家族や愛する人との絆を深め、過去の心の痛みを癒したいと思っている人

【あらすじ】

◇第1章～第8章

両親の離婚を機に祖母と暮らすことになった、訪問介護をしている24歳の上条永遠。彼女は人間関係が苦手、1人であることを好む。永遠が担当する、認知症の妻、その夫、引きこもりの息子である優馬の家庭に、彼女は違和感を覚える。永遠が優馬のことを気になり始めた頃、ご主人から家族への懺悔の告白を聞くことになる。

◇第9章～第18章

優馬から彼の日記を渡された永遠は、衝撃的な夫婦の事実を知ることとなり、それをきっかけに優馬と親しくなる。しかし、潔癖症の彼は永遠の過去の恋愛を受け入れられず、彼女を傷つける言動を繰り返し、心を閉ざす。永遠は、同級生だった友達の父や飼い犬のロン、職場の先輩に応援され、「魂の繋がり」を信じて優馬に向き合い続ける。それは、「生きている」という実感でもあった。

◇第19章～第25章

優馬と向き合う中で、永遠は周りの絆の温かさを感じ、少しずつ成長していく。そして、両親とのわだかまりを解放するために家族旅行を計画する。その流れで、父の部下とお見合いをすることになり、優馬との距離はますます広がってしまう。優馬は自分の気持ちを持って余し、その思いを日記に綴りなが

ら、どん底に落ちていく自分を責めていた。そんなある日、永遠がお見合い相手と食事をしている場に遭遇し、衝動的に相手に水をかけてしまう。

◇第26章～30章

永遠は、改めて優馬に惹かれている自分に気づく。再び、彼と向き合おうと決意するものの、困難な状況が続く。そんな時、同級生の父とロンが優馬と知り合い、彼の相談に乗っていた。そして、彼の日記を永遠に手渡すことになる。永遠は犬のロンにも励まされ、日記を読み、優馬と会いたいと思う。優馬もまた、人との出会いを通じて立ち直りつつあった。

成長した二人は再会して、気持ちを確かめ合う。周りの人達からの温かい祝福を受け、心からの喜びを感じるのだった。

(完成原稿あり。約 124000 文字)

追記

・関連作品として、『前世が人間だった犬…ロン』、『星子さんの恋文』があります。

【サンプル原稿】

『優しい今日を生きるために』第十五章の場面

恐る恐る階段を上り、優馬さんの部屋の前に辿り着いた。声をかけようとしたが、すぐには声が出てこなかった。私は深い深呼吸してから、まずはドアをノックしてみた。何度か繰り返したが、返事はなかった。

「優馬さん、永遠です。またお母さんのお世話をさせていただくことになりました。優馬さん、少しでも顔を見せてもらえませんか？ 心配なんです」

返事はない。

「また来ますから、気が向いたらでいいので、お話しできたら嬉しいです」

びくともしないドアに向かって、「今日は、これで帰りますね」と挨拶をして、一階に下りようとした時、いきなりドアが開いて、優馬さんが顔を出した。

「何しに来たんだ？ バカにしに来たのか？ 笑ったらどうだ！ もう二度と会いたくないんだ。僕のこと、ほっといてくれ。あんたみたいに、優しいふりしている女は大嫌いなんだ」

優馬さんは、それだけ言うと、バタンと音を立てて、ドアを閉めた。食事もまともに食べていないせいか、青白く頬のこけた顔に無精髭、目だけがギョロギョロとしていた。

私は、あまりの変貌に胸が痛んだ。一階に下りると心配そうな顔で、ご主人が待っていた。

「これほどとは……。ごめんなさい。今日はこれで帰ります」

そう言うのが精一杯だった。キッチンにいる川辺さんに、「お先に失礼させていただきます」と早口で挨拶して、私は逃げるように外へ出た。

駅に向かって、ふらふらと歩いていると、「永遠さん」と呼ぶ声がした。振り向いても誰もいないので、いぶかしく思うと、すぐ傍の公園から「永遠さん、ここです。お久しぶりです」と聞こえてきた。声の方を見ると、美穂パパが手を挙げていた。

知らないふりをしてしまおうかと思ったけど、ロンが私に向かって一目散に走ってきた。そして、私の足にまとわりつくように、「くぅ～ん」と鳴いた。私は、今まで我慢していた思いが溢れ出すように、ロンを抱きしめて泣いた。後から、後から、涙が落ちてきた。

しばらく泣き続けて、我に返ると……美穂パパが少し離れたところで立っていた。私は、ハンカチで涙をふくと、ロンのリードを持って連れていった。

「恥ずかしいところを見せちゃいました。あの……」

「いえいえ、今日は、ロンのやつ、なんだかソワソワしてしましてね。散歩に出ると、いつもは通らない、この公園に私を引っ張ってきました。どうやら永遠さんのこととなると、妙に鼻が利くというのでしょうか。僕も、『たまには有給を取れ』とロンに言われている気がして、のんびりしていたところです。残業続きだったので、犬にかこつけて、今日は会社を休んだってところです。そんなわけで、時間はたっぷりあります。もしよかったら、お話だけでも伺いましょうか？ 無理にというわけではないので。こんなオジサンに話すだけでも、少しは楽になるならと思ひまして」

美穂パパの優しい表情に、私はまた涙が出てきた。すると、ロンも「ワンワン」と、何かしゃべっているように吠えた。

「どうやら、『自分が相談に乗るから安心して話したらいいよ』と言ってるようです」

「まあ」

私と美穂パパは、公園のベンチに腰を下した。

「それでは……聞いていただいていますか」

「もちろん」とでも言うように、ロンが「ワン」と吠えた。

訪問先のプライバシーを話すわけにはいかないのに、優馬さんと私の個人的な内容だけを話しながら、また涙が出てきた。ロンは座ったまま、眠っているかのように大人しくしていた。

「きっと幸せな花嫁さんになれるよ、そう言ってくれたのにね。私は二度も逃げ出してしまって。もう無理かもしれないわ」

私は話し終わると、ロンの頭を撫でた。ロンは突然、目を開けて「ワンワン」と、本当に会話をするように美穂パパに向かって吠えだした。

「動物の勘というやつでしょうか。ロンは永遠さんの気持ちを察して、慰めているつもりらしいですよ。永遠さんと、その優馬さんという青年は、魂で繋がっているご縁かもしれませんね。いえね、僕も以前は、その手の話は信じてなかったんですが、この歳になって気づいたこともありまして。そんな、偉そうなことは言えませんが……。広い意味では、地球の生物すべてが魂の縁っていうのかもしれないですが、その中でも、現実に出会った人たちというのは、何か意味があるんじゃないでしょうかね。まして、心が突き動かされるような出会いというのは、人生の中で、そうそうあるものじゃないですから。恋愛感情を抱いた相手というのは、生まれる前に約束した相手だったり、遂げられなかった思いを成就するために出会ったのかもしれないよ。乗り越えるべき課題に意味があり、苦しい思いもあるかとは思いますが、越えた後の喜びは大きいんじゃないでしょうか。僕の意見ではありますけどね」

そこまで話し、美穂パパはロンに、「そうだよな」と同意を求めた。ロンは目を開けて、またしても吠えた。

「どうやらロンは、永遠さんの傷つく姿を見たくないらしいです。あまりに繊細であったり、幼すぎる心ゆえに、傷ついたり、傷つけたりすることもありますから。愛と憎しみは背中合わせみたいなものです。愛があっても、自分の中の満たされない闇をぶついたり、理解してもらいたい相手だからこその反抗や、相手の心を試そうとあがいてみたり……。永遠さんが傷ついてボロボロになっていく姿は、僕も見たくないです。永遠さんが後悔しない人生を歩んでくださいね。一般的には、条件やら何やらの選択もあるでしょうから。大切なことは、永遠さん自身が幸せになることですよ。まだ若いんですから、人生はこれからじゃないですか」

美穂パパは、父親のような視点で温かい言葉をかけてくれた。

「ありがとうございます。美穂は素敵なお父さんを持って幸せですね」

私は羨ましさを込めて、感謝の気持ちを伝えた。

「美穂がそう思ってくれてれば嬉しいんですがねえ。そういえば、美穂から連絡がありました。帰国が遅れるらしいです。美穂は美穂で、異国の土地でもがいているみたいです。順風満帆に行くことばかりじゃないんですね。人生ってというのは……。美穂も結婚する前には悩んでいました。魂のご縁だったんでしょうね。まっ、その話は美穂から直接、聞いてください。親でも、子供の心の葛藤のすべてを知ってるわけではないですからね。遠くから子供の選択を見守るだけです。永遠さんのご両親も、きっと永遠さんの幸せを願っていると思いますよ」

「そうですね。美穂さんの話も聞いてみたいです」

すると、ロンが何かを訴えるように、「ワンワン」と顔をしかめていた。

美穂パパが突然吹き出したので、「どうしたんですか？」と聞いてみた。

「永遠さんが悩んでいるのに、笑ったりしてすみません。ロンが、『自分が人間だったら、永遠さんにプロポーズしているのになあ』と悔しがっているように見えたもんですから。永遠さんにだって、選ぶ権利ありますよね。まったく、この犬ときたら……」と、美穂パパはロンの頭に手を乗せた。

ロンが怒ったように、「ウ～」と唸ったので、私も声を出して笑った。ロンと会うようになってから、辛い時でも、つい綻んでしまうのだった。

〈登場人物〉

永遠・・・二十四歳。訪問介護の仕事をしていて、担当先の同じ歳の優馬に惹かれていく

優馬・・・両親の愛情が薄く、繊細な心を持ち、永遠への憧れを抱く

川辺さん・・・永遠の職場の先輩

美穂・・・永遠の中学の同級生。結婚してフランス在住

美穂パパ・・・美穂の父親。ロンの飼い主、永遠と優馬の相談相手

ロン・・・自分を人間と思っているような犬。永遠に恋して、彼女を励ます